青梅市文化財ニュース

第２１１号

平成１７年５月１５日
発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会
青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　TEL0428-23-6859）

郷土の開拓者たち―「長岡」という地名を通して―

青梅市の東隣に瑞穂町がありますが、その西側の一帯は「長岡」という地名になっています。この「長岡」という地名は、青梅市と深い関係があります。

「長岡」という地名ができたのは明治２１年(1888)、市町村制を定める法律が公布されてからのことです。この法律によって江戸時代からの小さい村の統合が進められ、それまで「長谷部新田」・「下師岡新田」と呼ばれていた村の「長」と「岡」の一字ずつを取って「長岡」という村名になりました。青梅市域においてもこの時に青梅町、霞村、吉野村などが誕生しています。（その後長岡村は合併を繰り返しながら現在の瑞穂町の一町名になっています）

「長谷部新田」は、扇町屋（現入間市）の長谷部吉左衛門の出願によって開発された新田で、弟の勘次郎が名主として村作りに当たった関係で長谷部新田の名がつきました。主に青梅街道と秩父街道（現岩蔵街道）に挟まれた地域で、中央に新道を設け道の北側に人家を建てることにしました。この集落のある地域が「元宿（もとじゅく）」で、青梅街道と秩父街道を結ぶ南北の道路の東側の屋敷割りは間口１５間、西側の間口は１２間に区切られました。（東へ行くに従い、青梅街道と秩父街道の距離が近くなってくるので、１軒当たりの耕作面積を同じにするために間口を加減したものです。）

「下師岡新田」は下師岡村（現青梅市師岡町）の名主を勤めていた吉野彦右衛門（吉野家４代目当主、野上村の名主も兼任）が中心となって開発されました。開発当初は野上村や大門村もそれぞれ新田開発に関わり、野上新田・大門新田と称する開発地を有していましたが、寛延２年（1749）には、親村の百姓がなかなか入植しない、出百姓の定着が難しく名主が一時預かって年貢を代納するなどという事態が続いたため、新田に深い関わりのある吉野市右衛門（彦右衛門の子）のもとに「下師岡新田」として一つにまとまりました。これは、自分の村の百姓は入植を希望せず、他村の出百姓を招いて開発しなければならない。また、新田の年貢徴収や日常生活の監督等煩わしいことがあったためであろうと推測されます。

下師岡新田は、青梅街道の南側に屋敷をとり、その前が畑、その先が林になっていました。ほぼ短冊形の地割りになっていますが、地形の関係で屋敷の間口１２間、山林の間口は１４間となっており、また、江戸街道（現在の下水道道路と一部共通）が西に行くにつれて北に近づき、それだけ奥行きが少なくなるので、西側の百姓には、新町村境の小沼氏西側の不整形な土地が与えられ、１軒当たり１町６反歩になるように割り当てられました。

○下師岡新田……開発当初１０軒の百姓が開発した地域であり、新町村境から「師岡屋敷」

（裏面に続く）

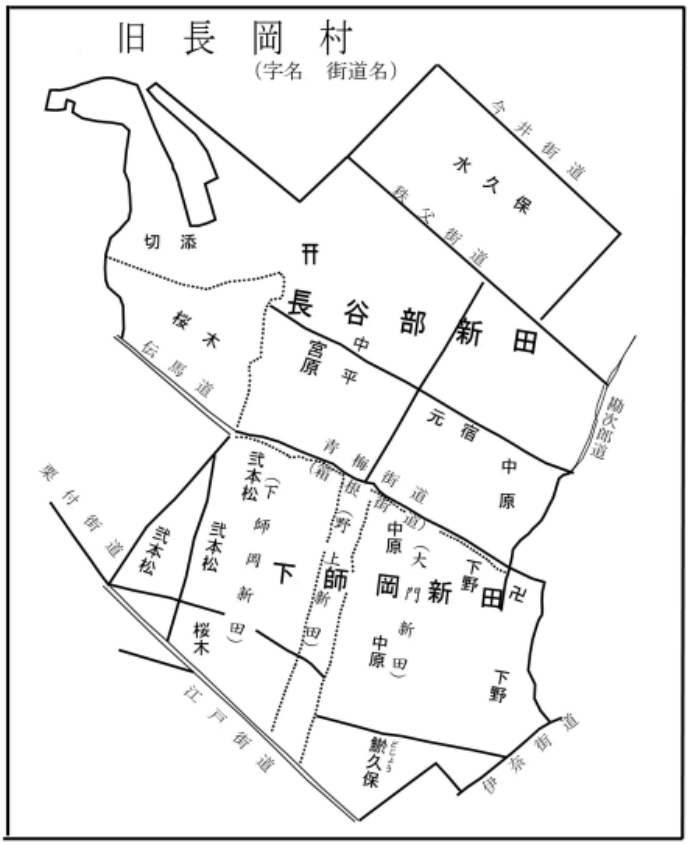
（俗称、下師岡名主吉野彦右衛門が開発の拠点として屋敷取りをした所）まで。自分は親村にいながら作大（作男の中の頭）を住まわせて管理しました。開発当初の農民には欠くことのできない井戸が掘ってあった所までの地域をいいました。

〇野上新田……師岡屋敷の東から羽村道までの地域で、野上村の持添え新田として開発されました。この地域だけでは５軒の百姓に５町６反歩ずつ分けられなかったので、下師岡新田の持分の中から若干分与されました。

〇大門新田……羽村道より東へ、東善院までの地域。大門村の名主市郎右衛門によって開かれました。この地域は、出百姓の能力によって開発地を与えたので、その面積は区々であったが、広い土地を与えられたものの耕作能力の限界から何回か再編が行われました。

こうして開発された下師岡新田ですが、３００年近い長い年月を経て、幾多の変遷を重ねて、現在は区画整理が行われ「長岡〇丁目」という整然とした街並みになりました。そして、新しい住宅が次々と建ち人口も急激に増えつつあります。

この下師岡新田の中に、当時の名称を残すものとして、現在「下師岡公園」・「春日公園」という２つの公園があります。「下師岡公園」は新田の名前をそのままつけたものですが、「春日公園」に関しては、入植した人々が親村である下師岡村の産土（うぶすな）神である「春日神社」（江戸時代は「春日明神」青梅市野上町鎮座）を分社して勧請した所だそうです。その後長谷部新田とのいろいろな関係で、寺は下師岡新田の東禅院、氏神は長谷部新田の愛宕神社（現入間市扇町屋の愛宕神社より分社）にするということで、春日神社は廃社になりましたが、現在でも町会名や地名だけは残っていて、「春日町会」・「春日公園」として地域の人々に親しまれています。



余談になりますが、長岡四丁目の福岡勲さん宅では、廃社になった春日神社を招き、現在でも屋敷神としてお祀りしています。

「地名」というものも調べていくといろいろな歴史を持っており、長い歴史の中で人々との多くの関わりを経て成立していることがうかがえます。

各地でハイカラな町名がつけられることが多いですが、地名に込められた意味をもう一度考え直してみることも大切なことではないでしょうか。

（文責　神森　正）